

安土の夜

耳もとを馬の蹴けて行く音がした。

眠っていたところを不意を打たれて、足を引いて起き上がろうとしたが、意識をとり戻して見れば浅い眠りの中の空耳であることが判った。ここは安土の城である。城は山の上、まして天守閣の二階の居間であるから、そんな馬の走る音などが耳もと近くする筈がない。不意に緊張した時の不快な動揺を覚えながら、信長は枕から頭を上げて見た。矢張り何の音もきこえなかった。城内は人気のないほど静かであった。実は昨日から風邪をひいていて、それを払うために家臣の青山虎を相手に酒を呑み、色々な話が出て少し過ぎるくらいに呑んだ。青山が下城すると、時刻はまだ早かったが寝についた。信長は安土の太陽である。彼が寝れば山の一切が森閑となる。しばらく一息に眠って眼を覚まし、枕もとの水を呑んだ。それからまた少し眠りかけたところであった。

眠れなくなったので、枕下にある燭台の灯を見上げてじっと焰のゆらぐのを眺めながら、四辺の静さに耳をすました。灯の色は気のせいか妙に平常より暗く、それでいて眼にしみ入るような気持である。熱が少しあるのかも知れない。辺りはまだそう遅くはないだろうが、馬鹿に静かである。この具合では城下の者共も寝たかも知れない。今夜も空は晴れているか。昨夜、十六夜と誰か言っていたが、晴れていれば大きな月が昇っているに違いない。町の反対側に拡がっている湖も靄がたれこめて、月の朧な光ににぶく光っていることだろう。その湖と町と野や森の真ん中に安土の山の城がこれも月光の下に静かに煙って聳えているだろう。眼に見えるようだ。高い天守閣、大きさ、新しさ、充実した形、すべての点に今の世に最大の重みを持っているのが信長にはこの上もなく気に入っている。気に

入りのこの城の高みにいけば、諸国のあらゆる人間に自然と睨みがきいて来、またそれ等の人間共の有様までよく見えるような気がする。敵味方の人間が、今の今、彼等の寝顔までありありと見えるようである。越後の謙信は先年死んだ。信玄なきあとの勝頼。かつての自分に似たところがあるような気もするが些か思慮の足りない、その用心のない寝顔。それに比べて用心しいしい、しかも不遜なほど着実な実のある眠り方をする家康。龜山に
いる光秀の風流ぶっている癖に気のきかない顔はどうだ。眼をつむると妙に頑なな表情になるが、自然と根性の表れるものか。今、鳥取の山名に向って準備している秀吉。顔全体は小さいが、おおきな眼と言いき出た頬骨と言い鼻と言い口と言い造作が派手に出来ているのは、その性格をよく表している。長島の瀧川一益。氣に入りの堺奉行の松井友閑。さつき青山と話したのは主にこの友閑と大阪の本願寺のことである。本願寺が信長と争いをはじめてからの堺奉行の役は極めて重要であるが、友閑はこれをうまくやってくれている。一体、本願寺との争いのはじまりはもう十年も前のことで向うから挑戦して来たのである。はじめは三好の残党と結んで有勢だったが、やがて向うから詫びて来た。これは友閑が外交的に奔走したのである。ところが間もなく中国の毛利と渡をつけて再び反抗し出した。またそこには信長の為に京都を追い出された足利義昭が黒幕となって介在していた。信長は明智光秀、細川藤孝、荒木村重、原田直政などをやって攻めさせたが、うまく行かない。暫くして信長自身も出馬した。しかし海上から毛利と連絡して敵は衰えるどころでない。その海上路を絶とうとして水上軍を繰り出したが、反って撃破されてしまう有様で、甚だ氣勢が上らず持久戦になって行った。ところへ思いもかけず、大阪天王寺の城にこれも本願寺に向けておいた松永弾正久秀が反旗を翻した。やりそうな奴とは知ってい

たが、如何にも人の不利に付け込んだやり方である。この不義不徳漢、蕩児、狡猾児、下司！信長は烈火のように怒ったものの、一方久秀の使える点もよく知っている彼である。四囲の情勢から言ってもなだめ得るならなだめるにしくはない。それで、何故叛くのか、何が望みか、出来ることなら叶えてやるから反意せよ、と詰問のうちに和戦両様の心がある信長の意を体して天王寺に赴いたのが友閑である。これは駄目だったので遂に久秀一派は強硬に片付けてしまった。悪いことはあとをひく。翌年今度は荒木村重である。信長はこれを知った時、もう怒るのに些か馴れたような気持だった。再び友閑がその反意の為に奔走した。それは前同様不成功に終わったものの、不利な状態にあっては村重の向背も少なからず問題だったので、信長は友閑の努力に満足していた。本願寺はなかなか優勢だった。彼等は信仰の力で戦意を固め浄財の力で装備も優秀だった。その善戦が東西に有力な支援を作り、その支援の為に勢いはますます熾さかだった。新しい支援には永年信長と友好を保っていた越後の謙信もあった。

しかし時と共に形勢も変わって来る。謙信が間もなく死んだ。村重もその翌年伊丹城を支えきれず中国の毛利に逃げ出した。大阪周囲の掃蕩もその後順調に行き、最早西に毛利と、東に武田があるのみとなった。その武田も漸く疲労の色を見せ、西では秀吉が善戦している。永い間手こずっていた本願寺の孤立が明らかになって来ると、信長はこれに大きく重力をかけてのしかかった。一方では大いに威嚇しつつ、また一方では柔らかに帰順することをすすめた。柔らにすすめるとは言っても、それは決して慈悲ではなかった。懐柔であって、厳然たる政策である。信長の気持から言えば、向こうから売って来た喧嘩であるし、むしろ嘗ての敗戦の口惜しさがこの期にのぞんで今更のように猛然として来るくら

いであつた。敵を憐れむ。それは時には人の情として抑えきれぬこともある。しかし、主従もなく親子兄弟もなく互いに猜疑し合い犯し合い呑噬し合い、それを日常としている今のこの時代に、最も注意すべき当面の敵に対して憐憫の情をおこすなどは、自分の精神の単なる弱化にすぎない。謙信が甲斐に塩を送った話をきいた時、信長は心の中で冷笑した。そして謙信は結局北国に蟠踞して終わるべきロマンティストであると断定した。敵を憐れむことも判らないわけではない。しかし自分ならば、敵を殺しその首級を前にして、或いはその首を焼いて髑髏にし、これを酒杯にして酒を呑み、呑むごとにその死を確かめ得るようになってはじめて憐憫の情をおこるのを可とする。投降者はまた別である。これは魂を失った土偶であり、また有力な資材である。それに活を入れるのはこちらの腕である。しかし当面の敵や、投降の機を失い魂を入れ換えてやる手段のこちらにないと見極めた相手に対しては、容赦のあるべき筈がない。

大阪は今ならやろうと思えば一つぶしにつぶし去ることも出来ないわけではない。しかし宗徒の反抗には思いがけない馬鹿力が出る。信長もこれには度々こりているのである。普通の武士の敵と違って彼等の気持は別の物であるらしい。他人が絶望するところから彼等の希望がはじまるようである。彼等は未来と言う死後のことに今生の一切をかけて釣られてゐる。その力の源泉は全く仮空であるとしか思えない。然るに、それが反抗に凝集し、何れの城主にも見られないような強さを示すとなると極めて現実的なものとなつて来て、かくも現実の力を動かし得る仮空事とはそも如何なるものかと、改めて考えざるを得ない。同時に大いに腹が立つて来るのである。信長の考えでは、信仰などと言うものは平和な時に平和に暮らすのに役立てばそれで充分である。その教化の当事者が干戈を振るうなどは

もつての外である。信長は、平和に役立つ以外の何等の権威も真理も彼等に認めていない。また認めることも出来ないのである。彼にとって唯一の真理は、上御一人あるのみである。他はその意味では問題にならない。若しこれを許しているとしたら毒にならぬ範圍で許しているのである。それをこの蔓り方はどうだろう。彼等は銘々に一派を携え、各自真理を擁し、また擁すると称して、それぞれ生命を投げ出していとわぬ信者を獲得していがみ合う。実に事毎にいがみ合う。争いを好むと言う点で彼等ほど好戦的なものは恐らくこの世にないだろう。静かに理を説かんとする時はいい。しかし一たび他に干渉し排除せんとするや否や忽ち慈悲の柔和も悟道の円満も消え失せて、世に最も得手勝手なもの、最も頑迷なもの、最も残忍無残なもの、その醜い姿が表れる。何にも増して信長は醜い姿が嫌いだ。眼に見える形の醜いのは勿論のこと、不信不義、偽善、勿体ぶること、我利我利で大声で自分のことばかり我鳴り立てて節度のないなどは大嫌いである。人は節度が欲しい。やるべき時は大いにやる。止めるべき時はぴたりと止める。そこに節度調子がなければ彼の神経は納得出来ない。彼は能や幸若が好きで、機会さえあれば役者を呼んで演じさせる。彼自身も舞を舞う。玄人ではないが決して下手ではない。彼は舞の中に戦は勿論、日常のあらゆることに及ぼし得る節度調子のあることを感じている。悟ってこれを尊ぶ気持ちだが、その舞に他人に見られない気品を添えている。彼は自ら舞いながらよく、人と生まれた以上はよろづに調子がなければならぬと心から考えるのである。それを彼等は人と見れば議論を吹きかけ、他宗と見れば忽ち齒をむき出す。犬が犬に吠える。あのたぐいだろうか。殆ど見さかいかなく実に節度がない。これは仏教ばかりでない。この頃さかんになつて来た耶蘇の教えと言うのもそれに漏れない。この紅毛碧眼の教えも先ず他の宗教の

排撃から布教の第一歩をはじめめるものらしい。何故自らの福音からはじめないのか。人を見次第喧嘩を売ってにおいて、実は自分は喧嘩は好きではないのだと言っているようなものである。この点では法華宗もなかなか激しい。信長はすでに十年も前に、その耶蘇と法華の比較をしている。その頃彼は用事があつて京都にいたのであるが、フロエという耶蘇教僧侶とローレンスと言う日本人信者が彼のところへ挨拶に来た。丁度その時、朝山日乗という僧が同座していたので、両者に宗論がはじまったのである。彼は公平な気持ちで、むしろ家臣に相撲でもさせるような興味を持って見ていた。彼にとっては議論の内容などは二の次である。ただ善戦して悪びれないのを好んだ。ところが暫く問答しているうちに、ローレンス等の平静なのに比べて日乗のえらくせき込んで笠にかかった態度や物の言い方が醜く眼について来た。きくところによれば、耶蘇の教えを信ずる者共は、大挙して寺院や神社を襲い、仏像をこわし鳥居を焼き払ったりする悪質な熱狂ぶりを示すとのことであるが、兎に角この時は彼信長を憚ったためか、慎重に構えたためか、日乗の逆上気味なのに釣られて行かなかつた。日乗は元来朝廷の御用をつとめていた僧侶で、文字もあり故実に通じ、才覚もきいて、要するになかなか切れる人間であつた。これと知つたのは、信長が上洛して祭中に御奉仕申し上げるようになってからのことで、その献策は屢々用いていた。またその便利なことが次第に判つて来ると、彼は家臣との気まづいことなどには秘かに日乗に斡旋させたりして、少なからず重宝していたのであつた。日乗は心にこれをたのみ、またそう言う私設秘書をもつて自ら認じ人にも睨みをきかせている自分が、容易にこの二人を叩き伏せることが出来ないところから、我にもあらずせき込んで来たらしい。信長はそれをみて興醒めた。やがて靈魂不滅の論になつた。人は死んでも靈魂は不朽とロー

レンスが言う。それをきいて日乗は、若し人が死んで尚靈魂が残るものならば、汝自身、身をもってそれを示して見よ。さあ示せ。自分はこの眼で見なければ承知せぬと畳みかけてつめよつたが、真つ青になって興奮すると矢庭に立上つて、

「よし！ 汝の首を斬つて試してやる！」

と叫ぶや否や、後方の刀架から信長の刀をとつた。信長は驚いて、
「無礼者！」

と大喝して坐を蹴ると日乗の襟首をとらえて引き戻した。そこにいた秀吉と和田惟政がすぐ日乗の手から刀をもぎとつた。

信長はこの時以来日乗を疎んじるようになった。

法華宗はその後、安土の町の宗論で信長の心証を一層悪くした。事の起りは東国から行脚の途次安土に寄つた一人の浄土宗の僧侶があつて、この町で説教を開いたのである。その場へ法華の信者が入り込んで宗論を挑んだ。それから問題が大きくなり、京都から双方の代表者が集まつて、安土で理非の決着をつけようと騒ぎ出した。信長は奉行に内意をふくめて、双方和解して引きとるようになすめさせた。浄土の方は異議なく奉行の言葉を承引したが、法華の方が妙に釈然とせず、一層事を荒立てるような気配を示した。それでやるならやるがいいと、信長の腹も決まつた。日を決めて一堂に集まらせた、その日は両宗の代表の僧及び審判の僧を中にして奉行配下の警固の者が三千人もひしひしとつめた。三千人。この大袈裟な警固は法華僧に対する威嚇である。信長はその場に顔こそ出さなかつたが、彼らしいやり方で露骨にその意志を表明した。形の如く問答があつた。しかし事實は問答などどうでもいいことであつた。暫くして、勝つた勝つたと誰やらの叫ぶ声がす

ると、警固の三千人がどつと一斉に立上り、長棒などを振り回し問答の座に駆け上がり、浄土宗方の僧と一緒に法華方に掴みかかってさんざんに袋叩きにすると、勝利のしるしとして袈裟をはぎとった。全く有無を言わせぬ結末であった。信長はあとで事情を聴取し、横車を押した法華宗の責任者を僧俗一人ずつ首をはねた。去年のことである。

信長は彼等宗教家の喋々たる論議を機嫌よくきいていることもある。しかしその内容を我が身にとり入れて考えたことは一度もない。従って何宗への特定の関心と言ったものは一切ない。一向も禅も浄土も法華も耶蘇もみな同じである。ただ自分に反抗さえしなければ一切お構いがない。その意味では現在羊のような浄土宗が最も無害である。耶蘇もかなり執拗で五月蠅く、また将来ますます五月蠅くなる傾向はあるが、しかし我が国へ来てからの年月が浅いせいにか兎に角まだ気持ち若く健康で、その僧侶信者達の態度素行には大体矛盾がない。紅毛の僧侶は船で一年も二年もかかるような遠方からはるばるとやって来る。それが他の何の為でもなく布教のためのみで単身異境に埋もれる覚悟で来るとしたならば、その意気は壮とすべきである。こう言うひたむきな点は信長も好きである。また彼等には新知識がある。鉄砲も彼等が持って来た。そのこと一つでも武将としての信長の信条にどんなに変化を与えたことだろう。同じように遠眼鏡がある。虫眼鏡がある。気のきいた機械仕掛がある。素晴らしい織物がある。彼等のもっている知識もそれらの持って来たもので容易に証明できるような至極判りのいいものである。これ等は実利的な信長にはその保護に捨て難い効用を感じさせる。しかし、もとよりそれもそれまでの話。時に信長が耶蘇信者を或る程度鼻舐めに見たところで、教義そのものに何かの関心をよせたわけではない。その点は至極冷淡である。それを知らないで、機嫌よくもてなすから真底からの同感者だ

ろうと思つたら大間違ひである。信長から言えば、多くの場合そんな時は善意に應えるのに善意をもつてした程度で、ひと度何か不都合があれば一切関係なくばさりとやる。人の悪い感じもしないではない。しかし人を悪くして酷薄に彼等を操るところに自分の人間としての自信も感じられ、少しばかりの快感がなくもない。

なかなか眠れない。眼は冴えるばかりである。片方の鼻がつまって来たので、寝返りを打って灯火に背を向けた。眼の前に永徳にかかせた屏風がある。眼をとじる気にもなれないでその松の絵を見ていたが、思ひは僧侶とそれにわけもなく追従して行く下民達のことを離れなかつた。

しかし法華も耶蘇も兎に角健康で陽のよく当たつた感じがする。ところがその真反対な陽の当たらないものがその他にある。何と言うか、よく鷹狩などで見も知らぬ野や山際にはいつて行くと出つくわす小さな祠がある。薄暗い木立の中に、じめじめした沼などを傍にひかえている。真新しい幣や土団子や土偶などのあるところを見れば、下民共の心に生きているものに違いない。中には髪の毛の束ねたもの。束ねたその髪の毛の汚れていればいるほどなまぐさ腥なまぐさい感じがする。虫が食うのか、切れた毛先がその辺に散らばっていることがある。何の社か、辺りにいる土民にきいても一向に要領を得ないことが多い。誰が建てたのか、何時の間にか建っていて、眼の病に効いたり、吹出にきいたり、子のないのによいとか、足の悪いの、何の足か知れないが人に言えないような病によいと言う。四月八日に子供等を集めて甘茶をふるまう寺院の明るい賑やかさや、格式のある神社の清浄な爽々すがすがしい気持ちとは似もつかない。人の心の暗いところをよ扱よつて、ひそかに忍び込んで来る。腐れた雰囲気をことさら好んでいるかのような感じ、人間の一切の邪悪なものとのみ結びつき、下

民共のどうしようもない不幸とのみ結びついている。一種の妖気がとりまいている。日陰の人目につかぬところにおいて不可解な蔓^{はびこ}り方をする。不可解なだけに確固とした方策がつかない。こんなのを日蓮宗や浄土宗など一緒に考えていいものか：：そう考えた時、不意に胸の奥で強くついて来るものがあった。それは信長に反抗した宗徒が、駆り立てられた末、いよいよ死地に追い込まれた時に出て来る表情である。その狂熱的に刃向う様子を見ると、矢張りこのような一種の妖気の出るのを覚えることであつた。日蓮宗のようなものも追いつめたらあのようなものになるものだろうか。今、猫のような浄土宗も圧迫したらああいふ表情をするだろうか。あの妖気のこもつた反抗ほど後味の悪いものはない。彼はそれを感ずるとその不可解な力に負けまいとする対抗意識が無暗に起つて来て、自制を忘れて勃然^{ぼっぜん}とした気持から、行き過ぎるほど酷薄な残忍な行為を敢えてする。自分でも何をし何故そうなるかがよく判る。考えて見れば、負けまいとしていきり立ったのでは、すでに半分負けていることなのかも知れない。だから出来れば、思い切つた処置をとりながらも、冷静でありたいと思うのである。

数日前、彼は無辺と言う僧に逢つた。その僧が湧き起こしている非常な評判を耳にして、城内に呼んだのである。無辺は廻国の僧で、安土にはかりそめに寄つたと言うことであつた。城下の石場寺にしばらく滞在しているうちに、秘法をもつて病を治すと言う噂が立ち、次第に噂が高くなつて来ると、男女の病人が争つて寺へ押しかけた。境内や本堂には、米炭の類から高価な絹布類に至るまでの様々の寄進の品がうず高く積んであつた。寄進は、お水をいただいで治つたという病人や、多少よくなつたが一層よくなりたいと希う病人などの上げたものである。狭い寺の境内に病人が立ち並び、行列をつくつて、その先は山門

を出て大路に長く曲がり、あとからあとからとつめかけるので、その列は何時見ても短くならなかった。近くの寺の番僧が臨時に雇われて専任の整理に当たり、門前では餅や飴の類を売る店小屋が立ち、その品に無辺餅とか無辺飴とか言う名さえ自然と出来た。ことに、最も大事の秘法とは丑三時の秘法とか言うことで、無病息災であるがただ子のないのが病と言う若い女房なども少なからず交じった病人の一人は、この大事の秘法を受けようと境内に火を焚いたりなどして夜中ひしめいている有様で、こうなると時節柄尋常ではなかった。無辺は祈祷一念に起居出入傍眼も使わぬ聖者振りで、山のような寄進については、少しも手をふれず顧みないと言うことであつた。信長はこれを聞いた時少し眉をよせた。手を触れもしないと言う寄進をどうして受けるのか。病が治ると言うことについては、治つた例が実際になければそんな群衆が集まるはずがないわけである。それにしてもただ話だけでは判らないが、兎に角、徒手空拳でこのように人を集めることが出来るこの種の輩には不思議な力があると言わなければならぬ。一度その男を見ておきたい。

無辺は石場寺の住職栄螺坊につれられてやって来た。信長は座敷や庭に通す人間ではないと思つたので厩うまやの土間で牀机しょうぎに腰掛けて待っていた。終わつたらそのまま遠乗りに出掛けようと思つたのである。無辺は栄螺坊と並んで信長の前方にある蓆の上に坐つた。歩いて来る時の背丈はそれほどは思わなかつたが、坐つて見ると恐ろしく座高の高い男で中背の栄螺坊と頭一つ違うほどであつた。薄汚れた白衣を下着と共に重ねて、その長い胴にそりを打たせ、頭は長い頭髪を無造作に後ろで束ね、狭い額から頬へかけてのどす黒い皮膚と、三白眼の青く光る眼と、気味悪く厭に赤い唇とが目立つた。高い鼻の先は止血をした指先のように白かつた。信長は二人の挨拶に会釈したまま暫く物も言わずじつと無辺の

顔付や様子を眺めていた。その青い眼を見てみると、野山で草いきれの中に毒蛇の異臭を嗅いだ時のような不快な気持ち尻の方から上がって来る。信長がじっと見ているのに無辺は身じろぎもしない。顔を上げたまま眼も動かさない。視線は直かに信長と合わせたままいささかも眼を伏せたりそらしたりする気配がない。家臣の中では、世間から鬼のように言われる者も、信長からこんな風に、こいつはと言った眼光で注視されて顔を上げていられる者は一人もない。それをこの一野僧が意外にも平気で受けとめている。信長は眉をよせた。無辺はまたそうした信長の気持をよく感じていて押し返しているものようである。小癩など信長は心の隅で呟いた。同時に無辺の眼の色が少しかげって見え、そうして押し返す努力の中に、自らの生涯に於ける最大の人間に出会い、ぶつかっていると意識が十二分にあることが判った。無辺の唇が幽かに動いた。しおである。信長ははじめて口をきり、穏やかに訊ねた。

「御坊の生国はどちらか？」

厩舎に呼びつけたにしては丁寧である。無辺はそれに答えて、

「無辺」

とただ一言いった。信長は怒りもしないでうなず點頭いたまま、その様子を眺めた。無辺の言葉のぶつきら棒な、辞儀のない不躰な調子は、相手が信長であって見れば死を覚悟している上での事であろう。またそこには別個にそれだけの自信をもっていると見ていい。毒蛇の自信かも知れない。信長は重ねてきいた。

「唐人か天竺人か」

無辺は再び、

「修業者」

とのみ答えた。信長には、この坊主が身に寸鉄も帯びず、他に何等の有力な支援もない体で、一体何処からそう言う対抗心が生まれるのか不思議だった。捨鉢かとも思えるが、それにしてもこちらに応えてくる力に秩序がある。信長の額に一たん柔らいだ筋が再び表れた。手に持った鞭を握り直すと、

「うむ。凡そ人間の生国はこの日本か、さもなければ唐か天竺の三つ以外にはない筈と思う。それ以外ならば、妖怪か変化か。妖怪変化ならば、一つ火炙りにしてくれようか」

突然容赦のないことばを叩きつけて身をのり出した。無辺は一寸顔を伏せたが、

「生国。生国をきかれるとあらば……まことは出羽の羽黒の者にて……」

信長は笑い出した。もういい。これ以上興味をもって訊くことも無くなったと心の中に思った。傍にひかえていた城下の町奉行の菅谷九右衛門に向って、恐ろしく軽蔑したような調子で、

「愚民を惑わす売僧。即刻、安土を追放せよ」

と言うと立上って、前の二人には簡単に、

「立て」

と言った。九右衛門が傍へ行くと、栄螺坊につれて無辺も立上ったが、膝をはたいたり、ゆっくり履物を足にはいたりして、至極落着いている。今あんなに明瞭りと、体裁のない折れ方をしていながらまるで恬然たる顔付である。糞落着きなのか。誇りとか知徳の微塵もない野僧的厚顔か。それとも……不可解ながらこれが下民どもを集め寄せる力なのか。信長はまだ言い足りないものがあるのに気がついて、二人について退って行く九右衛門に

向って、

「待て。……一日、城下を引き回した上で追放せよ。そうだ。見せしめの為に、頭を斑まだらに
刷り落せ。裸にして縄をかける、その態で引き回せ」

信長は畳かけるように叫んだ。無辺はこの時一寸振り返ってこちらを見た。突っ立って
叫んでいる信長と視線を合わせたが、そのまま顔色一つ動かさずに向き直って歩いて行っ
た。少し仰向き加減にして歩いて行く姿は憎いほど悠揚としている。その様子に比べると
栄螺坊は勿論のこと、九右衛門までがまるで従者のようである。それは城下の町民の中の
世界に占めている無辺の位置を自ら表しているようにも見えた。信長はその後姿をじっと
睨んで見送りながら、何となく差し控える気持ちがあつて平常の果斷に出ないのが、我な
がら解せないくらいであつた。

その無辺の姿が今も見える。静かに糞落着きに落着いて坂を下りて行く姿が見える。後
から九右衛門と栄螺坊が恐ろしく神妙な様子でついて行く。城の坂を下りて町へ出た。町
の家は一軒のこらずがらんと空け放され、人っ子一人いない。海の底にいるような無人と
沈黙の町の通りを、無辺は歩いて行く。とある小路から俄かに子供の群が表われた。それ
が無辺の後ろに列をなしてついて行く。見ると子供達はみな頭を綺麗に剃り、何故かめい
めい白い風呂敷を一つずつ背負っている。そう言う子供等の列が小路から限りなく出て来
て、漸く途切れたかと思うと、そのあとから同じように綺麗に頭を剃った大人の男女が同
じように風呂敷を背負って続きました。これもえんえん蜿蜒と続き、遙かにきこえる読経の声に合
わせて歩いて行く。この装束でこの人数で彼等は何処へ行くのだ。例の秘法とやらをやり
に行くのか。蜿蜒とした條虫のように長い行列の先頭には、無辺が天を仰ぎながらゆっく

りと行く。その長い胴は親指のようにそっている。やがて山と森の境にある沼に達した。無辺はそのまま沼の中へ歩いて行く。影のように歩いて行く。続いて子供等も次第に水の中へ進み、水の底に進んで行く。例の秘法をやる場所はこの水の底に違いない。読経の聲が水の中からも陸の山や森の樹々の間からも、雨のようにきこえて来る。水の底に進むものも陸に続いているものも、この読経の合唱に足を合わせ、前方を向いたまま憑かれたような眼付をして進んで行く。誰一人として信長の方を見る者がない。信長がそのすぐ前に立っても、宙を見るように虚ろな眼付をしている。下民の男女のあとから、具足物ぐそくもの具をつけた兵卒どもが行く。兵卒のあとから侍が行く。みな読経に足を合わせてゆっくりと歩いている。馬に乗った者は馬を降り、馬も読経に足を合わせて行く。しかも誰も信長の方を見る者はない。士卒等が何の誰と言うことは一人も思い出せないが、みな自分の家来であると言うことは判っている。それでいながら信長自身も自分の家来達が一人のこらずそんな知らぬ顔で行くことをさして不思議とも思わない。ただ、やつのことで列の終わりが来たので、水の底に何があるか見てやりたいと思う。それだけが念頭にあつて列のあとをついて行くだけである。歩調が読経の調子につり込まれ勝ちで腹立たしい。水際まで来ると何時の間にか無辺が前に立ちほだかっている。そこを退けと言おうとしたが声が出ない。無辺が正面に立って、その青い眼で信長の眼を射ると、肺腑まで氷の剣で突き刺されたように身のうちがぞつとし、またかつとし、熱いのか冷たいのかわからないような汗がにじんで来た。信長は思わず一步退いて、刀を抜こうとして気がつくのと、手にしていたのは乗馬の鞭である。なむあみだぶ。なむあみだぶ。なむあみだぶ。読経は三拍子急調子の合唱に変わり尻上がりの調子で気持ちをかき乱す。無辺の眼が俄かに拡がり、水辺の穴が水を

吸い込むように四辺の物の姿を溶かして迫って来た。その眼に押されて次第に顔がのけぞった。足は地に釘付けにされたまま、頭だけが後ろへ下がって行く。体が逆さになるかと思ふほど下がって行く。後頭部がしびれて来て、小さい鈴が無数に耳のはたで鳴り出した。鐘の音さえ入り交じって来た。なむあみだぶ。なむあみだぶ。破れるような叫び声さえ聞こえる。信長は頭を激しく振り、渾身の力をもって立ち上がろうとした。無辺の瞳の中に沼の水の沸き立つのが見える。その激しい泡立ち沸騰する中に、子供や下民の男女、兵卒などの影のような姿が、流れの中の塵芥のように翻轉はんとてんするのが見える。なむあみだぶ。なむあみだぶ。なむあみだぶ。水の高さは、見る見るうちに叡山の高みに盛り上がり、その頂から無数の僧侶稚児俗女の狂乱した姿が、振りしぼる叫び声と共に信長の胸の上に落ちかかった。下からは、叡山の根本中道をはじめとし三王二十一社を焼き、あらゆる僧坊堂宇、山に生い茂った千年の大木を焼いた焰の海が颯風さつふうを呼び、旋風を起こして轟々と立ち昇り、信長から叡山の凡そ生きとし生けるものは一物もあまさず殺しつくせと下知を受けた士卒等が、焰と煙の中に阿修羅のようになって刀や槍を振るうのが見える。四方を火にかこまれ真っ赤になった小堂から破れ鐘のような不動経がきこえて来た。一人の僧の黒い姿が焰の中に黒く映る。血に酔った侍が齒をむき出してその黒い姿を斬った。大きな釣鐘が谷へ転がり落ち、荒れ狂う火の爆発と、声をかぎりの読経と、焼け死ぬ男女の断末魔の叫び声とが入り交じる。急に雨が降り、焼け上がった山にはまた越前の一向宗徒が、黒い焼木の間を隠れるすべもなく逃げ登る。兵卒共がそれを追いかけて追いかけて、手あたり次第草を薙ぐように首を斬る。立ちながら首の落ちる者。斬られた腕を振りながら谷の奈落に泳ぐ者。仰向けに斬られる者。侍の振り上げる刀を思わず両手で掴み我と我が

身を割く者。うぬ。うぬ等、思い知ったかと身のうちがぎりぎりする。首が山と築かれる。首の山が高くなるに従って辺りは静寂に落ちて行く。やがて首の山の下から士卒が帰って来た。いずれも全身に返り血を浴び、疲れ切つてへとへとなつてゐる。月の下に黒く黙りこくつて帰つて来ると信長の周囲に集まつた。その中には秀吉がゐる。友閑がゐる。家康もゐる。勝家も光秀も一益もゐる。蘭丸もゐる。久秀や村重までゐる。黙つて立並ぶと彼等は一様に兜をぬいだ。頭は一人のこらず一毛も留めない丸坊主である。月に青く光る坊主頭が累々として見渡すかぎり続いて、そして一斉に、

「推参いたします」

と、どよみ叫んだ。

信長はそれをね返すように叫び声をあげて起き上がった。叫んだつもりであつたが声は出なかつた。燭台の火の瞬いた光に映る座敷の中を、視点の定めぬ眼で泳ぐように見回した。まだ後頭部が痺れている。見渡す眼に映る屏風や畳や夜具や床の軸や違い棚などが見た事もないもののように思えて、何故自分がこんなところにいるのか、自分は一体誰なのか、本当は何でもない百姓か何かなのに、ひよつとした間違いで真夜中にこんなところにおかれてゐるのではないか。安土。安土。ここは安土には違いないが安土が自分と何の関係があるのだ。いや他から来たのではない。確かにずっと前から十年も二十年も前からここにこうして杲然と坐つてゐる。しかし、ここから見えないところではあらゆる人間が死に絶えてゐるのではないか。その証拠にはこんなにしんとしているのではないか。そして今この世に自分だけがただ一人残つてゐて、その世にただ一つの灯火を見つめてゐるのではないか。そう思ううちに再び混濁した頭になつて目の前に靄がかかつて来た。こうし

て起きているのは本当だろうか。これも夢なのか。彼は堪えられなくなって、非常な努力をして声を出した。

「誰か」

声は出たが噎かすれていた。隣の部屋に返事がした。宿直の侍がはいって来て、襖の前の薄暗いところに坐った。彼はその侍の上の闇を見つめている。暗いところが変に白く見える。坐ったまま黙って信長の命を待っている侍も布をへだてて見るように薄れている。これがうつつの姿だろうか。信長が黙っていれば侍も動かない。

「よい。退れ」

侍は言いつけ通りに静かに立ち上がった。信長はその姿の動く様を呆然と見ている。侍が出て行くと辺りの静さが一層苦しくなって来た。体は重湯に閉じこめられたように重い。そしてじっとしていればいるほど体がふやけて行き、闇が体の中にはいつて来て、反対に四肢が闇の中へ藻のように流れて行く。この体さえまるで馴染みも関係もないもののように自分の心をすてて流れて行く。

「誰か」

信長は再び呼んだ。声を出すことによって気力を出そうとするのだが、一層噎かれて出て、求める気力は空を掴むように手応えがない。また返事があった。その現実の声も救ってくれない。今度は別の侍が出て来て坐った。信長は再びその姿を呆然と見つめた。その姿の正体を掴もうとするが、掴もうとすればするほど無限に遠のくようである。まだ姿だけの虚しいもので探しても手応えのないもののようにも見える。この侍も叡山でまた越前で荒れ狂うように奮闘した一人である。その姿がどうして今の自分に反応してくれないのか。

黙って用命を待っている侍の顔が、闇の中へ黄色く横に流れるのを見つめながら、彼は布団の上に起きている気の抜けた上体が、次第に前後に揺れて来るのを覚えた。

「退ってよい」

やっとそれだけ言った。それを聞いて侍は立上ろうとしたが、その時不図薄暗い畳の上をすかして見た。そして手を伸ばすと何か拾いとった。信長はその様子を見ると我に還ったように顔を上げた。侍は拾ったものを懐紙に包んで立上った。

「待て」

侍は向き直ってまた坐った。

「何か。畳に落ちていたか」

「はい。幕の屑でも御座いましょうか」

侍は灯火の方にじり寄り、懐紙を出して改めた。信長はその侍の火に近づいた額を見た時、急に周りの重苦しい空気が溶け去り、眼の前の幕がとれて、漸く大地を踏むような現実の手応えが蘇って来るのを感じた。同時に何故かこの侍から非道く嘲弄されているような気がした。強い咳を二つばかりして改めてこの侍の顔を見直した。額が目立って出っ張っている他は、眼も鼻も顎も尋常で、一体が実直な感じのする顔である。名前は知っている。年は確か二十七と覚えているが、その実直な顔立てのために表情はふけている。侍と言うよりは古い織物舗の手代か何かのようである。信長が黙っているのに侍はまたしまい込んだ。信長は突然大きく息を吸い、拳を握りしめて怒ったような顔付をした。額の出た侍は少し吃驚した目付きで信長の顔を窺った。しかし信長は怒ったのではなかった。顎はすぐゆるんだ。彼は急に、額の汗が冷たくなって背中も冷えて来たのに気がついて、あ

わてて横になった。

「左様か。塵か」

こう言つて信長はそのあとを何と続けようと考えながら侍の顔を見た。それから、
「よい。その心掛けはよい」

と言つた。誉めてしまうのは自分の気持ちと少し違うようであるが、ほめられて嬉しうな顔をしているのを見ると、その正直な小ささが可愛くもあり、同時に家来を教育する平常の自分が戻つて来た。

「侍とあるものは、それでなくてはならぬ。何も無いと思うところに、そのような心のくばりのあることが望ましい事だ」

彼は侍を見て、大した奴ではないが、誇張や夢や嘘のない現実そのものようなところが取り柄だと心の中に思った。

「熱いものが呑みたい。そうだ。味噌湯がよい。葱を少しきざんで入れよ」

間もなく大きな茶碗に湯気の立つ味噌湯をもつて来た。

「お風邪は如何に御座いますか」

「うむ。まだ抜けぬ。しかし今夜よく眠れば明日はよいだろう。治ったらすぐ鷹狩に行く。用意をしておけ」

侍を下がらせてから熱い茶を吹きながら呑んだ。再び横になり一寸考えた。本願寺側にはもう一度折れて出ることすすめる。それで駄目なら矢張りここも悉皆掃滅する。無辺か。これは追放をとり止め、明日にでも探し出して斬ることにしよう。これ等の判断は何等気力の要るものではなかった。それよりもこの風邪を早く治したい。そして掛布団を引

き、暖かい物を吞んで暖かくなった体を寝心地よく伸ばして眼をとじた。

「新潮」昭和十九年四月号

249	239	238	237
頁	頁	頁	頁
翻轉	文字	上御一人	蟠踞
…	…	…	…
…	…	…	…
ひるがえる、空中を飛び交っているさま	学問	第一人者、唯一の支配者	(手段を選ばず)他国の領地や命を奪うこと。 根を張って動かないこと。